

『若きヴェルテルの悩み』における欲望の言説と秩序の言説

神尾達之

『若きヴェルテルの悩み』の中では、内なる自然としての欲望がそのまま言語化されることを求めるような言説と、欲望を分節化し、裁き、整理していくような言説とが拮抗している。この二つの言説の戦いの過程でヴェルテルは没落したのだが、彼がこの二つの言説に接することができたということは、また逆に、彼の生が創造の可能性を秘めていたことも暗示している。その意味で、ヴェルテルが翻訳したオシアンテキストは、ヴェルテルの言語の試作への可能性とその不可能性を同時に示している。この物語の最後の部分近くで、ヴェルテルはロッテの前でオシアンを朗読するが、物語全体の中でこの場面に与えられた位置価に注目したい。硬直した法に従って冷静に欲望を裁く郡長官やアルベルトの言説、ロッテや、更にはヴェルテル自身の整理する所作、「忠実な」「語り」をむねとしつつも文書を配列しそこに注釈を加えてしまう編集者の操作、これらは、整序の指向性を三重に帯びた場を形成する。ヴェルテルが朗読するオシアンのテキストは、このような言語空間の中で絶望的にもがいている欲望の言説にほかならない。欲望の言説はオシアンのテキスト内(荒涼たる世界)で吹き荒れるばかりでなく、オシアンのテキスト外(朗読するヴェルテルと聞くロッテが禁じられた口づけをかわしてしまう空間)にまで流れ出る風となって、秩序を固定化しようとする掟の言説の領域を乱そうとする。しかしこれによって実現したのは、救済の可能性をまったく欠いた暗鬱な自然であった。欲望の言説だけでは、ヴェルテルが瞬時体験することのできたあの晴れやかな自然を、その深さを内実として保ちつつ、軽やかに表現することはできないのである。欲望の言説は、そのままでは狂気の記述にすぎず、歌にはなりえない。欲望の言説が狂気の言説へと萎靡することもなく、掟の言説によってかき消されることもないようにするためには、つまりヴェルテルがゲーテとなるためには、リンネ体験が必要だった。『ヴェルテル』を脱稿しイタリアに旅立つ前、ゲーテは、自然を術語によって分節化してゆこうとするリンネの方法を相対化しながら、その一方で、自然との一体化による恍惚感がルソーのように狂気に向かわないようにするためには、自然を整序しなければならないことも知っていた。リンネとルソーの間を往還すること、これにゲーテは成功し、ヴェルテルは失敗した。ヴェルテルもまた、冷静さを保持し続けるアルベルトの「狂気」を批判する一方で、冬に花を摘む狂人や若い農夫の「狂気」を我が身で体験することもしなかった。その限りに於ては彼にも「生の円環運動」を実現する条件は整っている。だがヴェルテルには両極の間を往還し、それを芸術的創造行為にまで高める「移動における軽やかさ」が決定的に欠けている。欲望と秩序の言説の戦いを創造へと転化するためには、ヴェルテルは自己反映＝自己反省の回路から抜け出すべく、鏡の前から飛び立たねばならない。その意味で、リンネの方法への懐疑がめばえ、『ヴェルテル』の改稿が完了した時点で、作者ゲーテがイタリアへと逃走したのは当然の成り行きだった。カナリアがロッテの肩に向けて飛んでいったのと同じ程のスピードで、ゲーテもまた「すばやくアルプスを越えて」いったはずである。